明和二酉年九月一日

東叡山流滴馬次考記

国立公文書館
National Archives of Japan

今年はるかに風雨二月のなごり遠つゝもやあり川面をとゝとゝ打ひしかゝの百餘年の御忌にあゝを給ひし梯る卯月はじめのはむく
けゆゝ荒乃山にくゝふかけおくもりこゝき勅令
乃みのり行ゝ世弥ひ道師梅丑寺九宮譜誠

の右宮大臣上達部殿上人その外の女人あ
またたくさんていくしきみわさなりけるし
同じ年九月一日上野東叡山寛永寺北端塩
りて 御かしわきの流鏑馬ありさけと塗さ
けるくいときよの御ゑさきのまはりなる
へしゝ此の霧も天の威應なりや言ふ所定
まるる雲消く
神急なる叶ぬるといと言ふことなり紀ことなり

かしこき
御神事なりけるに物見の諸人ハ曉のかた
より時より行さはたる紀屋かしてかの屋敷く
号つきいはあ形ハ遠くさ國屋てしかしも
めこそ引くて御神事と形の屋敷ハく
けるくきめ黒塩とのあるもけふさてたる
形屋その日の御はけよい 祇園の東ふ
あるて疏とのもるる右ふ博ゆ言

其外にも陰陽師うらなひ馬場乃
左ハ姫さうと的さくぬへきの者なり大形さ
ゝ者也西はかゝ桟敷をとゝふく輪王寺殿官
人おゝ御ゝ不可ゝ也西ハ未も一法の桟敷あり
執政（御所市と称す）従四位下行侍従兼行右近衛権少将源
武元古京之丞従四位下兼行侍従源輝言従
四位下行侍従兼行周防守源康福侍中（御側衆と称す）従四位下行侍従源勝清参政（若年寄と称す）

従五位下信濃守藤原英持従五位下摂津守源忠
恒従五位下行主殿守源忠見西城参政（老若寄と称す）
従五位下行兵部少輔源忠香侍中（御側衆と称す）従五位下
周防守源康卿従五位下左近衛少将源忠友さの
不ゝて御徒武と称せらる其外武家小役まる
所の人ハ多くさゝ迄也ゝ其の人名列記ゝく
御祭事祥しゝ為ゝ設け作り始二乃的
ゝらはへきあらゝ也ゝて見記不可ゝ財

の勝者と為るべき騎射の武法と礼儀中りあるべからぬを記しぬ爲さきのたゆあり あるは馬場あるべし 馬場あるべしとまくまく流鏑馬合とん

給

射手と 打〻命せられまして くべかりまき

さる 御神ときめたり 礼は七日の後ものを

して天津のうたと問かろまんはまくまうて 者

ろいものの志ものぬ爲きかりものいたくよ

いくらいてたりたのを如たくにぬさまれみて

まへうとして事もなく毛ろ毛ろ祈き

たてせしよと関係りしもけよさはたらか

ろ既に日新も年の時くのりたなるぬ

射手奥是して馬よけり番ものへて文殊橋

りてる神よりさくは襲よあるぬ時の

半ゐまいは何くまでとうぶきく出立ぬまれこ
ゐ白のゐにくく変の紋ゐくゐる水平と云
ゐいろは紅杉葉本械賊すりわりさ人こそ紅は着
ゐまこ之不感の人は杉葉本械ゐそ云けるう義ゐ
は紅すりきめむものゐくの半ゐまにくいとも
心の花毋ふゐまはとりあやゐ芝いとえんゐ
着ゐうう夏毛ゐうやた多ゐしの行騰とはさ
白銀裝のちかいのめくく杉ひゐ紐ひと弟し

流ゐ皆手袋ゐくは大ゐ多ゐなく毛ゐ籠
はゐくくくゐと負うう本儀はさうつく
籠ゐまゐて調しゐ毋さいあるさゐまはゐ
籠を用ゐゐうの志こゐまるまうに矢はかく
矢なりまは鶴ゐはてくゐ小羽は公ゐは
引尾ゐくくゐ紀ゐうは公ゐ用はゐるゐくるゐる
秘伝ゐうし太のゐまゐ竹根は鞍ゐまいまく
持ゐ鞍ゐ貝鞍はゐけ地ゐかく心の殘鞍云

みえなく面の付脇かまへ扇のかまへくさん茜の
外いろ〳〵みな檀限茜は元文の佳例とれ
い侍る也とゆゑ障泥なく面者なりうしへ
いそのかゝ古さ面のしのちまるてなんをけり

給

はたちに射手は百十と名〳〵い十の一と名〳〵

いとう馳逐の達者なり馬ハ強足射手の馬
うくあるハ別よあるハ雪なりけまハふふ
面くを行くていみしうもの先くするいのハ
ゆきあるとはいまあはけ人なと思ハ出く是ハや
まさりるん彼まや行名たしと名こさ云つハ
いあへ我ハ心とれの射手の江戸
御厩の良歩二いきと初の新馬の
御神事のまに素晴の料なりさ少四番の次

戈ハ右腰指敷の扇をうして射手は右の前より
きらいしら袋指の射手のたゝ跡よりあゆ先を
そのかゝら袋指きよりひいそるよりあまして其
沙汰りおよそ弓袋は白よ十九布也的持
三人跡より書ひゝ添弓袋指小素襖帯を
指き麻のかゝよ袴を着しゆ

給

文殊楼より射手はうそら随所清はとうり
神宮の御前よりたらあるしゆ右敷のたを
志川ふ必ゑゝ志あたらいとかゝしゝ天
はらの神もおゝにけきやう帯まとと思ふ
ちうも也あちはかゝしけるさて此水敷のを
と神司より為給まはゆとや
御祭事はうおゝちゝよらるゝて事ちうや

中行しまり此附近流れ袋掛谷の隨所に門
の内まくに入さる次射手
神意我あへまて事とくり流鏑馬舎に於て
しく是をいつも射手所と番のさ面指おて
うし此附箭後さ源準松弓小系さらけまに
越前さ義原正壽とけるいいうへうり馬小系
つさくをはうし侍へあるまの松まにおたる
の置なくてからうはゆさ殺ふや箭後さ準

松答く曰此於ん神は正しき
君の遠川市神とをい馬と系ら
こう神の申の紀と越ん事其おそまるま
りあくてされの君思いうるやをあいけ
系ささしいうへさたるや彼も一はなりられ
一時なりはかり新年とやくへなるへさ此秋
勢を国侍へいたこの須市町まも活りあく
せくく感歎くさうはしし射手列とやら

のべて奉ふさあ金入里あ添弓袋さし
等をあくりらに入る者の弓とはあなら
り松まを

給

松くんかくはら人を殿ゝ従五位下源意次流
鏑馬奉行として　清名代の神祢とゝけ日記

所へ出座て今日ハ武うけ孫ゝ為る従兵帥（伊豆殿と称て）
小笠原縫殿助源持長かゝ射ゝ射ゝ
乃宮織伝へ申ハ前日已見かゝて弓場
のゝ大ゝ宮ゝ為る日記筆ハ書院軍
（清平院殿と称て）松平田宮源恒隆河内守左ゝ城智
通指大軍（大番と称て）原三郎左衛源親要なり恒
降ハ時乃弓太郎通指ハ拂底乃射ゝ為て
行ゝ為ゝ半別ゝ為る切者ゝ為ゝ小須郡長（宗須戸左衛と称て）

従五位下甲斐守源政貞従五位下行陸奥守源
頼永監察（伊賀守と称す）従五位下守越後守源忠香内
蔵頭藤原信就（ちゅうすけと称す）左衛門尉忠香信就
八郎左衛門尉（ちゅうすけの子なり）甲斐守源政貞
右京大夫（小性組と称す）佐野達次郎藤原
満存書院軍宅同伊織藤原紀峯逸見八郎助
源忠休伊丹六郎左衛門藤原景興松平玄庫源
尭賢新軍（彩四番と称す）永田半助源政素会人として

言場の本末より居て馳射の式を記し
給
的持者の的携出て三ツの的立て置て
射て並び居る如く馳射始り別て
日記不り射射の門射水流流馬舎と出て
弓を京師に入れ国の毛を以て

馬とあやませけるを八杖ひとつ又
射よのもとより迫侍（伊小姓と称す）従五位下能登守源
準松従五位下越前守菊原正寿小納郎（伊小納と称す）
弥一郎深津菊原正豊左九郎兵衛菊原一徳
權之助日根野菊原言雄一学九郎源政長教馬
治木穂積安節書院軍一郎左衛門胡桃菊
原真昭大軍幸之丞窪田源伊虎書院軍
又兵衛小栗源信寿群屬（小雲信と称す）岩吾水野

源守常久郎迫菊原寿敬書院軍教馬
水野源勝英長内神保橋長光親軍平三郎
亀井菊原清水小納郎郷八落合源右久
かしのもとより菊八花のもとに
後藤笠乃六郎のもとより日新のもとに
移さるべきたる春は伐もめつらしわすれぬる
八夜日の日乃ちとつたれい種よ老らは色の
日のことなるやのもとに徹ふゆをむすび逢者歩

あゝわまはるかくて弓場をふゝとゝ為まゝ疎ち
京とゝく一の射手六間より為まくの射手
辰の方よりみくゝ間まとなくゝ馬と立ぬ
七間より十間より一間まくの射手は未申方より
むかいくゝ弓をゝくゝより十二より十六まくゝの
又弱い成のうゝにむかいて射さゝ成るゝ
へきちぬ人添を疎ゝさゝて弓場をにゝ
見馬をゝくし水かいは射手を毛素引ゝ陣て

ゝゝをゝるさ海なゝ

一番の射手の的立一ツ的をゝくゝ二三の的を
立ゝ是ハ一の射手庭形ゝ井入今ゝ 市神平

始りぬるこゝく物見新法人はよみあへるなく
まもなく法師〳〵まもかくあるべきなる運命
附ハ世ふきるふよりなるよりかるけるも事ふ
殊勝なる

給

馬ひいふもおもろきあへふ城格勒の財を
なり事はいかきかゝく心法ひ〳〵馬をや
ゝ志川ゆりぬ高知ゆ矢あき山〳〵く
法ひ二度かまハ市廣城知ゆきて笠の場
三度つくろいあへきをうしろへまて川是を
珍敵の扇ふゝなり

伝

矢筈ゟ取矢を番ひ弦を張よ左様ニ
一の的射割く流布ゟ矢持ゟ二の的を
鶴成ゟし形ゟて三の的もまて射あて
ゟ左様の行者ゟ神たるゟの志ゟ
ゟ言ゟ左様ゟ形ゟしゟるあ申せく流鏑
ゟ舎ゟ前ゟ京ゟ立ゟ

終

此形ゟ三ゟの的ゟ的串あさまて矢を
的ゟくけたゟを左持ゟ添捨鞦ゟ扇取ゟく
男持ゟ外ゟ歩ゟ的持ゟ流ゟて馬場ゟ
ゟ入ゟ出ゟ矢ゟ正寿の的ゟ三ゟ
的ゟ左ゟ射ゟけ出ゟ笠ゟ馬場押ゟくゟい馬を
ゟ出扇捨て三の的皆射割ゟ

終

その外さまざまのさはりくさまざまの
矢ばかりなく射もありて古き教をはなれ
馬より敵打射義をのへくこの的云いたくて
射けまの釈の圓位なれば言をけるさはる法師
の塵潔うたくなれば打ちいとくたの堪能
物ぐさい生まれとおりのへけるしたくたう
なり化物なれ対くんまいいの形る秘曲をの
るし形ん

怪

誠に害毒を消除魑魅妖災をもさけしむ
為なるとの何とのの穀ん打ちのみたあり梯
なる　神事なりぬとかまてるに中しも
如るのいとに死餐をくるむ人をみるたら
あうあへくなのあのしまけるさはいこもさ
う厳重かうに為になむあうし

給

弛射の儀式おはりて馬ども
屋ふさの舎より入たまいぬる日記所より
出居をしへ人々を各しそきつそぬ射手流
鏑馬舎をいでゝ
神の御前より列立たる
事はめでたく敵の音をも祈らるゝ
さて裝束所へ退入く射手長袴と着し田沢

を殿ばらをはじめ今日の武よあひうりめる者ハ
御方方祈る祝さけて賞しは祈祷とな
しの神酒を飲たりぬ

給

そもゝ弛流鏑馬くはしへ毎年八月五日百敷の
武德殿にて殿ばらをみしい大君の近衛兵衛の

弦射覆し給へる禮式を模して執行奉る
神社の祭禮なり其さかり世をめぐりて伶
人の名も聞けば東遊とゝへる又り
秀卿朝臣の秘訣伝授古事盧潛の受伝
奉ること見て之を

伶

後ろの方に絶えしを右軍室町殿称さ賞し
めて此射藝の古風を伝へ給ひ給ふ
さよりて今へあり此射藝の何流流儀馬
乃式乃絶しを二ツ巻を餘りの書ハその
式をあつてむ事いかゝ事ハ
ドせしとなむ此事の事のみしい永禄乃ころ
の文なり此式をこゝにかゝあるも
うれしきの事なり喜保乃ころ尋ね

思ひたちまふくはて元文三の年にそ初め
まねし

綸

さて其頃射角の馬をもまなりまて
拾數の扇を一の射手はさしそ　命せて
まねし支ちとも鈴りをもまふ馬し射

を法ならしくあこのあとをのの
約をまを絶えるをはさきをれるをはて
綸をそけを雑有たてなりけるかる大禮を
なり武法ぞのいるこそ誠を重しまて
あをことをも拾をまし

綸

此道我家に伝へあるや中ごろ伝
祖小笠原氏流なる長高喜子伯耆守氏長建武
貞和の頃の人相続て弓太郎と勤て弓
代々弓馬の師範たり等持院殿のれは當
流此流と号我を信じるるの古式流と号
へしとて奥うき伝りしら弓馬故實の
正統とうりぬ殊に遠川ゆや伯耆守持長の
乃ち奥義をこそ

絵

其後世みな武礼もとまるとて喜保
乃師代々いおの国掃部助持長殿助
持長弓馬の師として宮儀伝くの所
より教命ありけるこそ安けれ乃なり

絵

かく要ありかく紀さまもみる様にてあま
ぶくの矢乃のるこうたくに色きの段なる
よう志数人も打ちなるんいかてなけ
かきるなくしさはるかしこ紀御代の
事あるを侍へ乃特易あの妙附るあくる
となむ志ろこそ者特長なく形ふ立ちて
ろ乃ぶくまきるかふ

繪

ようてさるいろ乃ぶ様画るかさしを
ろ乃武乃ことと志ろ侍事ぬ的あいまと
事ハ法量秘説等さ志りてふみ事ふ
かくよ先紙乃まハ志ろくこふを比侍ぬ

繪

松の葉のちりまがせて正木のかつらかく
しかるとふまし
神若の御車よ廉を迎けむ春日野の花
火の光消えぬ若草あけまの都免えぬる
風とくなく給ひしかり今よ百有餘年日
出ぬ孫井とうから田とたの
つとそれ誰のちりや何しの老人ぬら
ふ遠ちりてうぬふよ塔ちり中葉

有徳廟ゆ〳〵しかし文質やかんにうり
しより道ゝの物の師も有徳言ふうし
うちつきかくるのとをとをそせる内
さねそ月かくふたく　おりやけけ松ん
めくみふそ何なるぬ衆の風ゆ徒よ吹侍
角んたゝそ松ゆけなふ祈ひいう侍り
なり

逢殿助持易謹識